

天保怪鼠傳

五郎「さうかい、旦那様、お尋ね申します。番頭「甚九郎さん
……異なりました。お尋ねの字は、御殿の字で宜しうございませ
すか。甚九郎左様でございませす。番頭「宜しうございませす……
だ不器用でございませす。松五郎中々、旨みや今度、御物を書いて、其
はう。番頭「御元、誠仰しや、ちやアいせせぬ、それから松五郎
は、腹勢の、強しおらいたしまして、一歩、銀を四ッ出して、松五郎代
を取つて、お呉んおせへ。番頭「有難うございませす。毎度、有難うご
ざいませす。

これから、茅場町に参りまして、松五郎、此、味い、梅子の、立ッてる家
が、親分の家だ、サア、一様、に、お尋入り。甚九郎「へエ、水層、ある、住居
で、げすなア、さうして、本、口、の、耳、い、こと。松五郎「お、御殿、は、流石、商賣、は
け、に、直ぐ、に、本、口、を、お尋ね、てる、……エ、御殿、な、い、今日、は、親分、の、

天保怪鼠傳

宅で、げすか、治郎吉は、火鉢の、側で、煙草を、呑んで、居りましたが
治郎吉「イヤ、松が、宜く、来た、なア、サア、此方へ、昇んな、お前や、和女の
名と、同じな、禊、松が、来た、せ。お松、オヤ、ア、松さん、能く、来た、ねい
直ぐに、お昇り。松五郎「今日は、お客様を、お連れ、申して、来ました、水
戸から、お花さんの、お爺さんが、お歸り、で、お申して、御同道、申して、参
りました。お松「う、れは、能く、ねい、サア、お爺さん、チヨイト、親分、小
花さんの、お爺さんが、……。治郎吉「さうかい、能く、ねい、で、おす、ツタ
み、ツチ、オ、ソツト、其、所は、端、近、だ、別、段、火鉢は、上げ、ねい、から、モツト
傍に、始めて、お目に、掛ります、小、哥、ア、治郎吉と、申します、さうぞ、御
心安く、……。甚九郎「先づ、親分様、萬兵衛殿、又、此、松五郎殿、から、聞
ま、して、ございませす、が、私、しの、留守、中に、娘、の、よ、と、に、お尋、ま、して、一
ト、が、お尋ね、御殿、切、お禮、の、申、さ、う、や、う、も、ございませぬ、有難う、存

じますみれば御内儀様でございますか。初にお目にかゝりましてございます。小花めの老爺でございます。どうぞお心安く願ひたうございます。モウ親分様私しは口不調法でございますか。腹の中では拜んで居ります。治郎吉「イエさう拜まれちやア却つて迷取だ不思議な御縁で小花さんと斯ういふことになつたのは松五郎からも聞きだらうし、又萬兵衛さんも話したらうが、老爺さん決して悪く思つちやアいけぬ。日 甚九郎「どういたしまして、誠に大安心いたしました。難有うございます。松五郎「オ、老爺さん、お土産を…… 甚九郎「左様さうか。盆を一つ。松五郎「ナニうんち堅エこたアいらぬい、ふりやア小花さんの老爺さんが何だとも思ひましたが、別段御不自由のねへ。宅だからといつて、途中で踏らぬい蒲焼を土産に…… 治郎吉「老爺さん、斯んな

みとは止せば宜かつたに、エ、斯うお松、小花さんの老爺さんが…… 松「オ、オ、ア誠に氣の毒な、斯んち御心配では…… 甚九郎「これも私しは中々さうも氣がつきませぬ。位ぬ、松さんがお立替…… 松五郎「オイ、うんならとを言ッちやアいけぬ。餘んまり正直過ぎたら、治郎吉「何んしろ娘に早く逢ひたからうオ、秀や、……二階から應と答へて降りて来る松五郎を見て、秀「オ、山の手ボンヤリしてゐるな。松五郎「筒棒奴、ボンヤリさるるかピンくしてエらア。治郎吉「和郎「目イト柳橋まで行つて小花さんにドンなお約束の座敷があらうと、水戸から老爺さんがお歸んあすつたから、三枚で急いで逢ひにゐいであせエと小花さんに言つて来て呉れ、これから見分をる使にやり其中もう一人の見分を呼んで、次郎吉「コウ手前は御苦勞だ。おれから伊

勢田に行つて何を旨えものを五六人前、番頭さんに腕一掴骨を折つて寄越して呉れといつてうれから歸りに岡本に行つて中位ぬの所を二両ばかり焼かして、漬物を澤山附けて持つて來いッて……甚九郎がモロモロ先刻のは二両ではございませぬ、アレは一両で……松五郎「エ、斯う老爺さん餘計なことをいひなさんか 甚九郎「うれでもお間違ひになりましては……松五郎「間違つたかつて、どうでも宜い、餘まり馬鹿正直じやないか、どういふ彼是する中茅場町の伊勢田から料理も來る鯛も焼けて來る思はず酒宴が始まります、其中娘の小花は駕籠に乗つて來て小花「姉さん今日は お松「オヤまた太早かッたねエ、能く來てお呉れた、お前さんの阿父さんが歸つておいでなヨ 小花「ハイ治郎吉が「サア、小花さん、お前の旦那様選ひていと言つてた阿

父さんが漸く歸つて來なすつた、兎に角無事お顔を見て喜びあせい、コソ老爺つさんお前の娘ッ兒も斯んお立派な藝者にありましたヨ、また藝者といふと人は卑しめるけれども今ぢやア藝者の世の中だ立派な奥様になるのも藝者が種だ何しろしみく逢ひあせひ 甚九郎「もう私は一ト目見ると驚きました位でございます、コレ小花や色々心配もさせたが治郎吉親方のお陰でお前もまア宜かつたおう 小花「阿父さん……一ト言ひて顔を見詰めて涙ぐみ 小花「阿父さんまた命があつて、水戸から返つて來てお呉れたつたねエ、またさうしてお前は瘦せたこと、といふも親子の情、次郎吉も其情を悟りまして 次郎吉「サア小花坊、お前も是れから能く稼いで阿父さんに樂をさしてあげヨ 小花「ハイ固より妾は其覺悟でございませす 次郎吉「又老爺さ

んもふれから娘の家へ引取られ樂に生涯を送んおせい 甚五郎
雖有う存じます、私しは如何なる仕合せ者でございませうふれ
も偏へに親方のお蔭、小花が傍から 小花阿父さん其代りモッ
年を取ってマッマ一つお前に願ひがありませうが、勝負事は止
めて下さい、此上お前に勝負事をされては…… 甚九郎もういッ
て呉れるな、面目を、采の目もぞも祿々分らない癖に不圖仕事
から木村に近づき、瞬く中に大きな負い目、うれが爲めに身上も
人に取られ、娘までもなくおす所も、早ややれといッてもやり
はしない、安心して呉んおられゆゑにモッ賭博打なぞ、は……
次郎吉の顔を見て 甚九郎もなだ様はさうではないが、外のもの
には一切交際を、積りたから、安心して呉れるといふ何といッ
ても眞實の親子の對面、斯んな嬉しいといふとは、いと喜ぶ顔を見

て次郎吉の親切も通じ、夫婦も共に祝しました、
扱てふれよりして甚九郎は柳橋の小花の家の二階住居、茲に親
子は始めて安泰に時を暮しました、
ふちらは木村軍介、一旦は小花のふれを忘れて居たと、あろ計ら
ずも翌年の四月の初めに柳橋の橋上に於て始めて盛者姿の小
花を見たといふのが、軍介の病の再發、これから軍介は手を廻へ
品を換へまして、彼の小花を川長、又は萬八、唯今の龜清、これら
上等の會席料理屋から致して、小花を呼んで金にあかして軍介
が口説て見たが、昔し生娘の時分、さへ應ぜざるもの、況や軍介
の爲めに種々雑多の愛目に出逢ひ、自分の親まで苦しめた仇き
何で靡からやうもございませぬ、茲に於て軍介が最早諦めるか
と思ふと、凡惱の犬は追へども身を去らぬ、諦め兼ねたると思ふ

から致して、悪者三人を語らひまして彼の小花を茶の水に引出して、強姦をせんとする、今度人殺しもございまして所場所が丁度茶の水であるから、看客へ念のため一言お断り申して置きます

第九席

昔時六月三十日には禊の祓と申して百人一首にも禊を夏の水に申しなりけり杯と云ふ歌がありませ、東京を江戸と申した時分只今の水道橋中の三崎稻荷又は真先稻荷三圃稻荷邊で、禊祭をいたしました、當今ではあるか無いか、私も氣を留ませませんが、此昔の禊祭には大層人が出ました、洒落た人は多く柳橋から船で真先へ参りまして、其歸は植半か向島の大七又は武藏屋などで参つて歸る之を通人の遊興としてありました。

柳橋にて當時飛鳥の落る程の勢のあります和泉屋の小花と名乗るは前回に述べました美人、豫てよりお約束がしてあつたものと見へまして時は文政七年の六月三十日船は柳橋の伊豆屋、御客と云ふは番町邊の旗本が二人、今一人は御茶道の坊主でございまして、其名は大塚金彌、川崎與之助、茶道坊主高木順庵と云ふ都合三名、何れも武家ではありませんが通客で、伊豆屋の船頭は長吉、箱丁の常三、船橋が久太郎、屈強の腕ッ扱が三人、船の方で働いて居る、斯ういふまづ御座です、是は真先へ行つて夕景まで船の中で遊び戯れました、其歸りに再び大川を下つて来て、柳橋へ這入るとする、梅川から新しく料理を入れさせまして、高木順庵が順、コト小花さん今日といふ今日は相手もなくてお前、獨で嘸疲れたらふ昔馴染のお前がまだ常盤津小花——と云つ

天保怪鼠傳

ては失禮だが、牛込の場末でムグリの藝者をして居た時分から
懇意にして居た此方等の顔を立ちて能く今日は交際して下さつた
人間と云ふやのは出世をするに兎角昔を忘れ憚りながら吾儕
は柳橋の藝者だよ通常の御客と一緒に船のお催しに行くやう
な身体ではないッてツント澄ますのが人情だが、能くまア一緒
に行つてゐる呉だ、川崎さんも大塚さんも喜んで居らつしやるよ
小花何ういたしまして私風情が贅澤を云ふなんや、まだナ
カ、其んな資格にはなれませんが、昔馴染で御最良にして下さ
れば、此んを嬉しい事はありません 順假にも然う云つてゐる
だ、何様心持が宜いか知れやしない、就いては小花さん、是から
後は陰氣を神田川へ遣入て牛込の揚場へ上陸するより外に道
はない、此處でゐ前に別れると、大層此方か淋しくなるから、御

天保怪鼠傳

迷感でもあらうが、悪いようにはしなから揚場まで送つては
呉ないか 小花承知いたしまして私も久振で揚場へ行つて、吉
田屋のお内儀さんに逢つて色々禮を言はなければなりません
事がありますから、夫では切望を言はなれければなりません
ヤ連てく處じやない、此方から同船を願ふのだ、船頭やモウ大抵
梅川の料理も揃つたやふだから、ソロ、内川へ船を入れてお
呉れ 長合點でござへやす是から船は神田川へ遣入りまして
御断り申す迄もあく、當今の美倉橋夫から和泉橋、昌平橋杯を渡
り、水道橋を指してやつて參る、丁度水道橋下まで来た時分には
何しろ潮が悪うございまして、丁度水道橋下まで来た時分には
て、お茶の水の森山と云ふ鰻屋の下まで来ると、四ツの梵鐘がホ
ーンと川水に響いて聞へる、今も昔も形地は同じ事で、右の方本

天保怪鼠傳

郷の櫻の馬場、唯今とは違つて人家も稀少で、左の方は駿河盃の
遙かの崖 順、オイ船頭く 長、ハイ 順、此森山の下へチヨイ
と船を繋いで呉れ、少し用があるから 長、へい宜しうございませ
す、客人の言ふ事だから、森山の下が揚り場にあつて居ますから
开所へ船を繋留ますと、高木順庵が懐中から手紙を一本取出し
て 順、船頭誠に御苦勞じやか此年紙を持って本郷御弓町と聴い
て御弓町へ行くと久永と云ふ旗本がある、其邸へ之を届て来て
呉んか、無謝は使はねへよと高木順庵が紙入から二朱取出して
紙に包みて夫へ出す、船頭の久太郎か之を受取て 久、ぢやア小
哥がお使に行つて来ませふ、皆さん御免なせへまし、半圓一枚で
手紙を持って行つた切何時まで経ても歸つて来ない、此間船の中
では盃の献酬をして居りましたが餘り長いから小花は不思議

天保怪鼠傳

に思ひまして 小花、チヨイと高木さん、其久永さんの御邸が知
れないので、マユく 尋ねて居るんじやアありせんか 順、直
に知れさうなものだナ、併し歸つて来ない處を見ると知れない
のだから、オイ箱丁の常公お前御苦勞だがチヨイと行つて見て
来て呉ねへか。と又高木が懐中の紙入から二朱金を取出して
順、常公骨を折て探して呉んねへ 常、へい畏りました。と又箱丁
の常が二朱買つて出やうとする 順、オイ常公能く聴いて行き
ねへ此土手を上つて右の方へ行つて向ふへ曲ると建都といふ
旗本がある、其邸を右に見て委細構はす直直に突當ると大横町
へ出る、其側の銀否の樹のある邸で久永と云ふ千石ばかり取る
旗本だ久太郎め何をして居るんだらふ大急ぎで..... 常、畏り
ました箱丁の常も追使に頼まれて、ドンく 足を早めて出て行

つたが是も亦歸つて來ない艦の方では長吉が唯一人でお燗の湯の冷却をいやうに七輪の下を鉄いて居る
其裡に談話が少し途切れた、スルと高木順庵か 順、モン川崎さん大塚さん、過日京都から奈良の方を見物して歸つて來た人から買ひましたが此品は其奈良の鹿笛と云つて、乾鹿鹿を呼ぶ笛だと申すが器用に出來て居るじやアありませんか、本當の鹿の音の通りでびすと懐中から彼の鹿笛を取出して 順、此んを梅で、ヒュー、と吹立ると此鹿笛が合圖に成て居たが思ひも寄らざる川岸の藪の蔭からして、ヌツと出たのは武智光秀擬きの木村軍介、ノツ、と船に近き 軍、イヤ諸君今日の御働さ軍介御恩に着ます 順、本村君、藪蚊に喰はれて嚇お待遠うで……軍、イヤ唯今夫へ參つて謝しますと刀を取て左に提げた木村軍

介上布の帷子黒緞の羽織、息成、ヌツと船の中へ這入て來るを小花が見て愕然 小花、オヤ貴郎は軍介さん……道理で光景が訝しいと思つたがモ、高木さん御申儀をおすつては往けませぬよ、何でございまするまア、思ひも寄らないお茶の水で船を繋いで置いて爾うして鹿笛を吹いて軍介さんを喚出し……ア、是は皆さんでスツパリ御相談が出來て居て、吾儕を是迄誘ひ出し……云ふを打消し軍介が 軍、やかましいや、此四月不圖見染た柳橋の上、昔に變る藪者風煩惱の狗に追はれて適はぬ事と思つたが藪者とあれば金盡だ度々喚んで口説いてもピンヤンと氣強く勿附られたからモウ破れ感觸今日といふ今日は金に明して友達を頼み、腰袋の船遊山釣出した計畧が圖皇に當りモウ此方の想ふ儘だが、此衆の前もあつて了得に仕事も出來ねへか

天保怪鼠傳

ら今夜と云ふ今夜は牛込の揚場から上陸して即ち俺の荒邸外
に邪魔のねへのが幸ひ、一ツ蚊帳に二ツ枕皆さんの前で氣の悪
い事を云ふやふだか、ソッホリ汗をかかせて呉ねへと命がねへ
と爾ふ思へ此所は處も茶の水俺の言ふ事を聴くか聴ぬかと
此所で兎や角云ふのじやねへ、出及庖丁や牛切庖丁戮殺しに詞
ものど其んな野暮を荒療治はしねへから安心してまア俺の云
ふ通り、何處迄もウンと云つた方が宜からふせ、高木も片脇から
口を出し、願可愛さ餘つて憎さが百倍軍介さんは斯ふ云ふ真
實男畢竟和主が可愛から起つたと、此方は友達尽の義氣で仕
た事サ、ソッ川崎 與本當に憎まれ役はしたくもねへが、軍介さ
んが痛くお前に惚てるから、入らざる世話の提灯持夫で此方等
も共々骨を折たのサ。大塚金彌も口を出し、金到底俺達は憎ま

天保怪鼠傳

れ役になる覺悟だ、モッ好い加減に靡いた方が宜からふせ云は
れて小花は益々驚き、是は計畧に陥つたと思ひましたおむくに
も泣れぬ口惜さを耐へて、小花、木村さん汚あいな仕事をすするじ
やアありませんか往生盃で往けないから自分一人の力であく
大勢の力を借て船遊び此んな所へ連れて来て無理口説にするど
は相も變らず野暮な事をするじやアありませんかチヨイどお
断り申して置ます山の手育ちの小花でも、チッどやソッど例
橋の姐さん達に揉まれたから張と意氣地は辨へ居ますよ假令
殺される迄もお前さんの言ふ事は聴かぬから爾う思つてお
呉んなはい、軍、何とでも勝手に好き事を云つてろ、俺の方です
る通りにすれば夫で宜いのだ、ヤイ何だ、開所から面ア出し
て何だ、長へい、御免なせへやし、小哥は長吉と申しやす樹

天保怪鼠傳

橋の伊豆屋の抱へ船頭の小野郎でびす、モ、旦那方段々御様子
を承はりやしたが委しい事は存じやせんけれど、柳橋の藝者と
云ふ者は腕尽や何かで爾う自由になる譯のものじやアとせへ
ません若しや藝者が御執心なら誰を取持と斯ふ願ひがあれ
ば小船乗や野太鼓が其取持をするのが役夫が爲に出来て居る
茶屋船宿夫をスツバリ扱にして此んな所へ引ッ張出し、無理往
生口説くと云ふなア、夫は些と旦那道理が違つて居ませんか小
哥の相手の久太郎や、箱屋の常まで使に出し、小哥獨を馬鹿にし
て薄氣味の悪い、芝居掛りで藝盛から現れ出た木村さんどやら
餘り仕事汚な過やせふせ柳橋の藝者衆は感しや怖面に乘ん
じやねへ手柔かに願いやせふ、軍あんだと此野郎馬丁船頭
と人に賤しめられる下郎の分際で苟も天下の武家に致して失

天保怪鼠傳

禮な一言まだ彼此申すと手は見せぬぞ、長、モ、旦那何と仰し
やいます、軍、イヤ、サ、手前にア此大小が目に入らねへが、長、
エ、ハ、古風な事を仰しやるか、今時其んな徴の生た古い、
此大小が目に入らねへかとは何事だ其んな大きな大小が目
道入れば小船乗はして居やせん、小哥は疾に手裏に成て居や
すよ、軍、迂奴惜い奴だ各位此野郎を纏んでお仕舞ひなせへ
○オ、合点と一同船の中で立上らうとするを見て船頭の長吉
は息成板子小脇に抱込んで、長、サ、斯うあれば破れ感觸、天下
の旗本だらうが御家人だらうが其ん事を怖れるんじやアね
へ、外見はケチな野郎でも、江戸ッ子だけに虫のある、而かも所は
兩國の水で育つた、膝には跡へは引かぬ小船乗、遠州灘は知ら
ぬへが、佃の端や永代沖、何んな颯風を喰つても逆巻く浪に登鯉

名も荒磯の長吉たア俺の事一番相手に成てやらふか 軍イヤ
生意氣な芝居掛りの盛詞廻し盛んでしまへ 順ナニ此んお者
は坊主が相應の相手だ私に任せてお置あさい鶏を割くに何ぞ
半刀を用ぬんやでまア木村さん御田馬には及びやせんと替間
口調で夫へ立向ひ 順サア此野郎神妙にしねへか威しつげや
ふとするを長吉が 長全体此坊主が狂言を書きやあがつて迂
奴が悪いのだと板子を持って順庵の頭をボキンと喰はせる 順
アツと順庵は夫へ伏倒つて仕舞ふ 長サ小花さん確乎として
お出なせへ小哥は今直に箱丁の常や久太郎を探し出し加勢を
箱へ引つ返しやすから其間お前さん何んな事をして身も汚
しちやア可げやせんよ 小花アイヨ長吉どん吾儕は假令命を
棄る迄も自由にはならあいかから少しも早く加勢を連れ来てお

呉れ 長合点でびす。長吉は素裸体の儘土手へ駈上り、一生懸
命眞ッ暗、三度 長箱丁の常ヤイ、伊豆屋の脇櫓の久太郎ヤイ
イ……と呼びりながら駈出した、折柄向ふから来る人に思はず
パツタリ突當る。○何だ……ヤ、手前は伊豆屋の長吉じやアね
へか 長暗所ゆへ順だ租勿を……オ、恰と好い處で茅場町の
親分さん、實ア今大變な事が出来やした 治、何だ大變と云ふの
は…… 長實はコレ……とありし次第を殘らず物語る之を聽
いた治郎吉が 治、又も蒼蠅へ木村軍介、一度ならず二度三度、途
方もねへ畜生だ、ヨシ、是からは俺に任せて置け、悪いやうにはし
ねへからとる茶の水の土手に立上つて遙かに見下す船の中、ま
だく、小花には別條あき様子、誰が船を漕くか知らねども、段々
と水道橋を渡つて揚場の方へと進んで行く様子を、治郎吉は駈

と見定め 治上る處は牛込の橋邊先方為何んな事を仕やうと
も此方は巧く計畧の裏を書いて首尾克く小花を取返して吳や
ふと夏とは云へと頼被真深にいたして治郎吉が船と陸との道
は變れど其船の行手に目を着けく 徐かに往來を來る其裡に
空使に頼まれた箱丁の常も藤梅の久太郎も茲に始めて計畧と
必附いて引ッ返し長吉藤美治郎吉に隨行してお茶の水から餘
かに船の跡を續けて牛込の橋邊に來たる是より治郎吉が木村
軍介の邸へ先廻りをして小花を奪ひ返すの一條は次回に辨じ
ませふ

第十席

相變はらぬ木村軍介の屋敷は千五百石といふは名のみにして
主人の留守は外に人もなく奥も茶の間も僅た一人で賄つて居

る雇婆の六十ばかりになるお熊といふものが淋しきまゝに糸
車ブーくく頻に取て居りましたが お熊ア、今夜も最早
四ツ半でもあろうが殿様は何方から出掛けて往つたが何うで
何處に泊り込んで明日の朝法乎歸つて來る位のみとだらう口
入宿の口から此屋敷へ雇はれて來て三月越し方々随分歩行い
て見たが斯んな淋しき屋敷といふものは外にはない千五百石
だといふ話だが御用人もなければ女中も私し一人中間の市助
といふやつが僅た一人で門の傍に寝て居るばかり斯んな無雜
作の屋敷といふものは江戸中には外にあるまいそりやアさう
と殿様が留守だと又鼠めが頻に暴れあがる、く 何も食ふ
ものはないけれども膳箱を噛る音か何か喧しくつて仕方があ
い、オヤ、今夜は殿様の居間へも鼠が出るぞ見へる大した

ものもありやアしめいげれども何かに傷を付けなけりやア宜
いが最早糸をやめてしまつて、一杯やらうか知らぬお熊婆アは
獨言時にかタビ。空閑の方から案内なしに歸つて來る木村軍
介、ヤ一婆ア嘘を眠かつたらう、今歸つて來た。お熊、オヤ殿様
歸遊ばせ今も今とて獨言、此廣いお屋敷に私し一人鼠に喰はれ
る所でございしました、能くまア歸つて來て下さいましたオヤ殿
様大層美くしい幽者などを、何處から引張つておいでなさいま
したか中々お手際でございませぬエ、何うも恐入りましたねエ
軍介、婆アおれに付けちやア些と仔細も五細もあるもどだが、ま
ア跡で話をしやう、サ一小花萬更知らぬい其方でもぬい、去年の
暮に掛り合ひを付けて手前も此宅に引取られたもどもあるの
だらう、相も變はらぬ獨身者、木村軍介の心持、些と察して呉れま

ア柔順しく下に居るエ、此時小花は何にも云はず、差俯向いて覺
悟の体、お熊婆アは殿様見れば見る程美くしい此幽者、斯りやあ
何處から受取つてゐいであすつた。軍介、斯うまた婆アに餘計
なふとだから何にも言はぬいか、二三年跡から乃公が惚込んで
居る此女初めは此近所で常盤津の師匠をして居たが、素人の時
分幾ら口説いても手を變へ品を換へ、謀計を廻らしても、乃公の
心に陥らぬい所か不圖したことから幽者に出で今では柳橋で
の一枚看板和泉屋小花といふ全盛の身体最早諦らめては仕舞
つたが此四月の初めに柳橋で思はず出逢ひ、うれから此方は顔
木杭出來ぬいことも金次第と色々やつて見たとあるが、何うし
ても乃公の手際にやアいかぬいから友達を頼んでマンヤと引
出し、禊祭を口實けに茶の水まで船を引出し、それから牛込の

揚場から友達に金をやつて別れて仕舞ひ、嫌やかかるやつを無理
往生に連れて来たが今夜といふ今夜は一六勝負の談判に愈々
嫌やだと吐かすときは番町皿屋敷に倣って庭の井戸に逆さに
して斬込む積りウムといつて往生すればッッホリ汗をかき積
り何れにしても婆アさん、些とお前の手を借りにやアならぬい
から念の爲めに斷つて置くよ。お鶴オヤ、さうでございま
すか、併し願様悪は急にはいかぬもの、一番悪いお考は庭の井
戸に逆さに釣して斬込むなど、真逆うんなふとはなさうはし
ますまいがうりやアお止めなされた方が宜うございますッッ
龜の甲より年の功、又柔はり私しが此娘の得心のいくやうに及
ばずおがら口説いて見ませう、殿様暴氣なふとを仰しやらぬに
一ト口飲つて下さいまし幸ひる出入の魚屋が来ましたから夕

川岸の傍に生貝を取つて置きました田舎料理の私しの手際
の拙悪に昨貝を拵へて置きましたから、ふれで一杯召上りまし
軍介成程流石は粹者の末と見へ高徳行届いたお熊婆アさん酒
魚の支度をして置いて呉れたとは忝けないサア小花氣を入れ
替へて酌をしろヨウア女といふものは百年の善悪も他人に
寄せるといふして見ると善い亭主を持つのが何より仕合せ、自
慢ぢやアねへが千五百石で外の厄介もねへ木村軍介借金には
るが天下の直参手前が賭とさへ言へば直ぐに軍介の奥儀又家
が淋しければ何人でも奉公人も置いてやるし、横のものを縦に
もせぬ、榮耀榮花の四季遊山、芝居が見たけりや、變り目に勝手次
第に見せてもやるし、着物が着たけりや、綾羅錦緞、絨にしき勝手
なものを取寄せて思ふ存分着飾らせ乃公も外見になることだ

天保怪鼠傳

から連れて歩行いて人にも買められ、さうして惚氣けて見てい
といふ心まアウムと言つて、今夜ア打解けて呉れちやア何うだ
黙つて居るのは嫌やといふのか、何うしても此軍介を嫌ひ振く
んだあ。小花殿様今更改めてうんなふとを仰しやるには及び
ませぬ、最早私しもお答へのしやうもございませぬ、何うしても
貴方の心に従ふとは出来なはいといふ妾しの身体殊にお耻
かしいが彼の治郎吉とは従兄弟同士、約束をいたしました兩人
の仲、仮令身分は懸者でも心まで懸者にはありませぬから、先づ
お断りを申し上げます。軍介エ、手離しで惚氣を聞かしやがる
いやらしいやつだ、コン畜生、まア悪いとは思つても此美くしい
顔面を見ると、さうも手荒いふどの出来ぬいといふは、何といふ
乃公はデレ助たらう、まア宜いや婆ア酣がついたらう。ふ熊サ

天保怪鼠傳

ア、まア殿様一口召上がれ姉さんお前お酌でもしてお上
げられも嫌やキツイ嫌いやう、うれぢやア美しい姉さんの代り
に婆さんのお酌で一杯あがれ、サアお酒に代りはありませぬ、婆
アだといつても生れて直ぐに婆アとはなりませぬ梅干だ、
といつても花の咲いた時分には鶯鳴かしたみともありませぬ、オ
ホ、ホ、少しお酌がつき過ぎました軍介は腹立ませぬ、ツツと
大きな湯呑についで酒を呑干したが、顔に舌附めづり、斯りやア
髪お香がするせ此酒はいけぬい、チヨイト改めて見て呉れ、あ
熊、オヤさうでございませぬか、徳利が古いのだと見へます宜う
ございませぬ、外のお徳利にしませう、能く濯いで又酣をつけて
お熊殿様今度の上つて御覽遊ばせ、軍介が差出す湯呑に一杯
つぐとグツと一息。軍介、こりやアいけぬいさうも髪つて居

らアありやア婆ア國の中に何か道入ッて居るやうだといふ中に道は抑も如何に二合ばかりの酒をば呑んだ木村軍介、俄に様子が變はりまして、軍介ア、苦しいといふと見る／＼中に眼逆釣い口は閉ぢて物を言はんとしても舌が固ッていふもどが出來ず、虚空を掴む斷末間、七轉八倒の苦しみ、見る小花は悪い人とは思ッても此軍介の様子の變つたにブル／＼慄へて、小花ありやアお婆アさんどうかしたのでありますか、殿様はどうかしたのでありますか、と驚く小花、騒がぬ婆オイ／＼小花さんどやら少し其所を退いておいで、危ぶないから、オヤ殿様苦しみ出した、まア無さを苦しからうねい殿様、オット危ぶない、水を飲んぢやアいけませんよ姉さんや斯ういふ理由は何んにも不思議はない、私しも目當のさいふんお屋敷に誰れが月々一歩と四百文

で雇はれて居るものかね會には花の咲くもあらうと思ッて待ッて居ると今夜といふ今夜、主人の殿様が、お姫様のやうなお前を連れて歸つたのは初めは様子が分らなかつたが、段々聞く、無理口説、今宵否、應いはせせに田舎屋かなんぞのやうに、手足を縛ッて強姦とか又恐ろしい井戸に逆さに斬込むとか口で囁すか知らないが何でもお前の身の難儀と見て取ッて、どうか助けてとは思つても疲せても枯れても侍い一匹何うするもども出來まいから、不圖心附いた出來心宵に仲間の市助を使い、やつて買はして置いた此古屋敷の暴鼠退治をしやう爲め、あれが世にいふ岩見銀山鼠取り此一包を買つて置いたを好機の幸いお酒の中に少しばかり入れて飲まして見たとあるが、鼠さるるか人間にさへ此始末此狸梅ぢやア、何うせ苦しみ火け苦んで

天保怪鼠傳

息尽いて仕舞うに違いない、サア此中に些ども早く姉さん此處
を立退きお前一人ぢやいけなから私しが一緒に連れて行
つて、お前何處を目的に此屋敷を立退くのたい 小花「ハイ最前
からお前さのん御様子を見、又殿様の變るゑ姿、岩見銀山鼠捕を
殿様に吞ませるとは何ば悪い方でも餘まりあふとをさる
ぢやアありませぬか端ては此身に禍ひがかゝらうと儘、何うも
此儘妾しが…… 熊「ハテ氣の弱いことを言はあいで、お前
の爲めには現在復讐者で居りやア殿様の爲めに強姦され、殺
されりやア井戸の中に釣し斬り、何うせ樂の出來ない身体、私
の蔭で大危難が助かつたんぢやアあいか、恐圖くいふにやア
及ばない少しも早く立退き、と木村軍介が死にもやらす、七轉
八倒の苦しみを冷笑つて彼の婆が目を注げて居た、軍介の貯は

天保怪鼠傳

へてありませぬ金の在り所を錠を捻切り引出したして取らあるか
と數を調べ其胴巻を内懐ろに確乎巻き、衣服を自身引出だして
これを行季に確乎と納めて、奥と表の界に掛けた鳴子を引くの
を合圖として、仲間部屋からノソノソと紺看板に尻を端折つて
來かゝる仲間市助 お熊「市どんかい 市助「アイお婆アさん合
圖の鳴子を引いたのは何の用かは知らねいが、夜中お使かエ
お熊「イ、エ市公外ぢやアない、お前に些といふことがある、お前
まだ身体が本當に直らぬさうだ子 市助「ハイ何うも骨擲にあ
つちやア容易に身体は癒りませぬ、此間も友達で醫者の心掛の
ある人に聞いたところ、が買藥や何かぢやア癒らねへ、仲間の身
分で良い醫者に係るゑとは尙ほ出來ねい、些とばかりの錢せへ
ありやア、草津に湯治にでも行つて、さうしてまア成るたけ安

天保怪鼠傳

泊込んで毎日湯に這入つたから瘧らぬともなからうと、数
て呉れたが、先立つものは錢金婆アさんうれ故此市助は三十に
ならぬい身体で死ぬのを待つといふのは、果敢ぬい身の上で
さいます。お熊、うれを私が知つてゐるからお前に錢儲をさして
上げやう、三十両もあつたら湯治が出来たらう。市助生涯折
助を稼いだ所で三十兩といふ大金は出来つこはぬい、成程うれ
次びあつたら後ツくり湯治も出来ませうといつて金の出所は
.....
お熊、サアお前が働いてさい呉れ、ば三十兩はタツタ今
お前に渡してやるが乃公のいふふとは普惡共に聴くか。市助
三十兩の金さへ呉ればお前のいふことは聴くがさうして婆さ
ん其譯は。お熊、チヨット耳を貸しよ、お熊婆アは耳こすり、市助
ふれを聞いて。市助、フームうれぢやア、お前が殿様に変間買ッ

天保怪鼠傳

た鼠捕薬を飲ませ最早殿様を半殺し、成程連れて来た
者どりれから金を掻き出し、行李をト背負、乃公に背負はせ、一
緒に此屋敷を焚天國、成程さうして其連れて来た藝者も成程病
氣が癒りやア乃公の女房にして呉くる眞實かい。お熊、六十三
になつて外に樂しみがぬい此お熊、幸いお前の病氣が癒れば乃
公が死水を取つて買う聲にして彼の藝者の根性骨を叩き直し
て嫁に持たせ、乃公ア樂隠居で暮す積りだ、さうなりやア此方も
仕合せ、お前の料見はさうだナ。市助、宜うございませう悪いと
は知りながらミス。お熊、サア此所に來て見なせい、と市助を座敷
を背負いませう。お熊、サア此所に來て見なせい、と市助を座敷
へ通すと主人軍介はまた死にもやらす、目を見開いて座敷の眞
中に苦しみ煩悶いて居ります。お熊婆アは靜かに杯洗の水な

を片附けまして 熊殿様エ永々御厄介にありましたが首
尾能今日お暇が出まして有難うございます随分御機嫌能う勝
手にあ苦しみあさい左様なれば殿様軍介はウム／＼泣鳴つて
も身体は利かず苦しいが氣は確かに眼も見へる、ミス／＼婆ア
が此悪事己れやれとは思へども五体すくんで立つみと出來を
跡をも見返らずあ熊婆アが梅瘡に惱む仲間市助の賄付く足
を叱り懲して行李を背負せ其身は小花の手を引いて、熊と木村
と記した提灯を点け聞は綾おし六月三十日の真夜中、市谷の屋
敷を出て、其行先は何所か知らぬが時に不思議や軍介の次の間
にて此始終りのみとを確と見聞して居た一人の狭肌、密と庭に
飛下りて ○彼者等が行先きはオ、さうだとあ熊婆ア出行く
を見澄して置いて置いて塙を乗越へ飛鳥の如く急ぎ足三人の者の先

廻りをしたは是れ何者でありませうか看客諸君、大抵は御推察
あつて然るべく、これより大詰が鼠山飯綱権現の森に於きまし
て鼠小僧が始めて人殺しをするといふ及び木村軍介が積悪の
家餘殃に了るといふ當講談の結局でございます、チヨット一ト
息……

第十一回

江戸の地を遙に離れて雑司ヶ谷の果に鼠山といふ處がありま
す是は其以前法院杯が多く住んで居つた處で此府下へ荒神祭
釜じめ杯と稱へて出て來る修験者が皆此鼠山に住家を求め人
跡離れた静しい處であります、其傍に飯綱権現の社と云ふて、晝
向は暗き大なる森蔭、夜に入りましては彌々守る人もなき祠堂
の光景燈火も消へて仕舞ひ寂々々たる六月晦日の真夜中頃

此處に來たる三人の怪しき者は前回に述べました木村邸に居
りましたお熊婆ア同行と云ふのは不似合な今を盛りの十七八
になる無双の美人是れ柳橋の小花より重たき葛籠を漸々に力
に任せて背負うて來たは仲間の市助 市サア〜モウ此所を
で來りやア心配には及ばないよ沈着いてる田此んな淋しい所
へ連れて來たからお前は嘘を潰すたらふが斯うやつて木村
の邸を立退いたのはアんな殿様でも友達や邸へ出入をする者
があるから其んを奴等に跡を追駈られると吾儕は宜いがお前
の爲に能くおいから故意と方角を逸へて此んを田舎へ來たん
ですから安心してお田決して悪いやふにはしなないから 小花
ハイと答はしたものの前門の鼠を防いで後門の虎のためは此仕
合如何なる要目に逢はされる事かと唯ワナ〜戰慄て居る

熊コレヲ其んな様へるものではあ何も怖い事はありやアし
ないオ、市公やお前御苦勞たつた年齢が若いとは云ひながら
嘘まア疲勞たらふノ、市サア三十兩と云ふ金にあるのを樂
みに舌切雀の老婆じやねへが重い葛籠を承知で擔いで來たの
でア、一脱がしやしたよ時に吾儕のやふお下郎と云ふものは
金子を見ると俄に勇氣の附くものだ何卒まア外の事は兎も角
も三十兩今夜の仲間賃を早く渡してゐ呉んおせへ折助奉公を
して三十兩と云ふ金子は百年経ても溜る氣遣ひはあ財布に
入れて懐中に捨込んで見てへから後生だ早く渡してゐ呉んな
せへ 熊意地の汚ねへ奴じやアねへか到底やるに違エねへか
ら何うでも宜い親子にある間柄じやアねへか 市親子でも錢
金は他人と云ふ事があるから早く小判の額を拜ましてゐ呉ん

あせへ、ヨる婆さん 熊ぢやア手を出しなよ、ミツタンな男だ
ナ、併し成程夫も雨うかい、懐になげれば自分のものでないやふ
な心持がするか、夫じやア渡してやるから待て居なせへ、サ市公
三十兩には限らねへ、木村の軍介が年來貯へた臍繰金、幾許ある
が知らねへが、サアと買目は二三百兩、此臍繰ぐるみツツク、
前にやるから、皆お前の所得にしなせへ、市エ、お婆さん此臍繰
を皆を俺に呉る是は餘り氣前が好過るナ、本當かい 熊本當も
嘘もねへ、六十三になる年寄が、若ぬ者を欺したッて仕やふがね
へ、サ受取ンなせへ。市助は嬉し紛れにヒヨロ〜と密つて来る
呼吸を詰つて臍繰を市助の首に巻つけ、市お婆さん何を……
と云ふにも構はせ、力に任せてツツと締めた、市ウーンと市助
は身を悶撞いて苦んだが、丁度金の塊が吭の處へ来たやつを、非

常に締られたから呼吸が止り、構れもべく〜キツと云ふ
のが此世の暇、熊姐さんや市助は到頭息が切れた様子、アハ、
人間と云ふものは脆いものだし、今迄口を利いてたのに……
到底病人の此野郎、折助杯をして居やアがつて、横痂が癒つても
痒癩瘡が頭に吹出し、祿に人間に交際も出来ねへ身体、生れ代つ
て此度は大名にでもなれる熊婆アが黄金の引導、死ぬ處は飯綱
の森野郎今水葬にしてやるから喜んで居るが宜い。と帯の結目
を解いて彼の臍繰は己が懐へ確と入れて市助の死骸をば笹の
繁れる間から下の流へ突落す、始終の舉動に驚き居たる彼の小
花是は何うしでも此場には居られないと存じました——素よ
り大名高家の姫君や大家の令嬢と違ひ、温和い性質でも、其所は
大工の棟梁の娘で、常磐津の師匠から物櫛の藝者になつた苦勞

人、大抵呼吸も分りましたから、コソコソと暗を幸ひ此から下へ
飛下て逃んどするを引ッ捕へ 熊、オイ其手は喰はぬ、侍て、何
所へ往きなさる、オイ組さん何所から口が掛つたよ、お座敷は何
所だてへに…… 小花、ハイ伯母さん貴婦のお蔭で木村邸の苦
艱を遁れましたが、此行先が心元なく、私は何うも此所には居ら
れませんから恩を仇で返すやふですが、何卒私を助て逃がして
下さいまし 熊、コレコレ 歸らん事を云ひなさるな、四方八方反
浦中夫にモウ何時だと思ひなさる今の鐘は丁度八ツだ暗にも
目に立つ此姿で何所へ往かれるものか、まアゴツとして居なせ
へ、サ是から俺が本心を明かす、今邪魔を拂つて口留をする氣遣
ひもない悪事を知つた市助はモウお陀佛となつて仕まつたか
ら、お前の外に誰も知つて居る者はねへ、お前と俺の口より出る

ければ、今夜の始末と云ふものは、誰にも知れる氣遣ひはねへか
らまア安心して是れから俺と一緒に行き田舎にでも身を隠し
情夫が怒しけれア自分の眼鏡で手捲へ、野暮な事は決して言は
ねへから俺の娘になつて一ト稼ぎ川越あたりで稼いで呉れ、夫
も厭だど強強の事を吐かしやアがるど、直に板橋へでも連れてッ
て年一杯に叩き賣り、馬方女郎にしち録ぞ、其んお事を仕やふよ
り俺の云ふ通り恩返しだと思つて二三年も田舎藝者を叩いて
此伯母さんに樂をさせて呉よ 小花、伯母さんが爾う田舎藝
者にそれの宿場女郎になれのと仰しやるも皆金ゆへ、お金で
済むなら何うにでも吾儕が才覺してお前の恐しいだけ——と
云つても千両二千両と云つては仕方もないが、二百や三百のお
金なら何うとも工夫をして御座を致しますから今夜の處は見

天保怪鼠傳

遁して下さうましと云棄て逃げんとするを追迫り、領變掴んで
グイと引寄せぬ熊は忽ち本性を現はして 熊ヤイ此餓鬼ア、ニ
コく笑つて居れば好い氣に成りやアアつて……俺は通常の
伯母さんじゃアねへよ、迂奴等に云つて聽かせても分るぬへが
東海道を股に掛け三島女郎の成の果仙人塚のぬ熊婆と異名を
取た溢紙老婆三十年前は色氣もあつて多くの男を手玉に取ら
ありとあらゆる悪事をした揚句流れくで駿河國三五郎と云
ふ蕩樂者と夫婦になつて旅稼ぎ其三五郎には死別れ江戸へ流
れ込んで今じやア上板橋遺擲半次と云ふ破落戸の家に厄介に
なつてゐる裡に世話する者あつて木村郎へ月雇待ては海路の日
和どやら今夜の首尾から仕事をして天の興へる木村の金と、お
前のやうな代物を引渡つて来た俺の徳侍、枯木に花咲く老木の

天保怪鼠傳

全盛滅多に散らして宜いものかまぢつとして居やアがれど
帯を捕へて少しも放さぬ進退茲に谷まる小花時に不思議や又
候飯綱權現の社の格子の裡から密に夫へ脱出したる一人の曲
者が類被を真深に致し左の手にて小花の帯を捕へて大地へ座
はらせぬ熊婆の傍にスツクと立た彼の曲者、熊ヤイ訝しむ奴
が茲に居る真逆今殺した市助の幽霊じやアあるぬへ、开所に突
立つてる男其類被を取りやアがれと差出す手をば拂い除け抜
手も見せぬ合口にてお熊婆の胸腹を穿も通れどツブーり突通
す爰所の重傷アツビ一ト了得の老婆ドツとばかりに大地に
打ッ倒れる。
此時山風がヤツと吹来りて被りし手扱が取れを星の光りて
見替はず願 小花ヤ、お前さんは治郎親方じやアありませんか

治、コレ靜かにしろ、モウ外に誰も聽く人は居ねへか。小花「ハイ、聽いてござるは權現様か、所々に立て居る石地藏ばかり御安心なさいまし。治、今夜と云ふ今夜は、時刻は僅の中だか大層心配をしたる茶の水からの事を悉皆知つてるよ。小花「エ、何と仰しやいます、夫じやアお茶の水から……」治「ウム、今夜は水戸の大部屋で遊んで居たか出来が悪いから中途で切上げ、お前ン許んでも行つて、一口飲まうと建部様の前から土手へ上つて來ると突然俺に突當つた野郎があるから能く見ると伊豆屋の船頭の長吉よ、様子を聴けばコレ」と話すから直に助けてやらふたア思つたが瘦ても枯も相手は武家三人、此方は及物も持たせ迂濶に手出しも出來ねへから揚場に入る船を見い、陸を歩行いて揚場から木村軍助が這いてるお前を引立て神樂坂上

る所まで確と見定め道を轉へて木村の邸へ先廻り、軍介の居間と覺しき次の間へ忍込み、蚊蚊に喰はれるのを忍耐して待てる。と程よく歸る木村軍介、無理往生の例の口説き夫から後はお熊婆の岩見、銀山のアノ始末、金まで浚つて市助を語らひ、逃出す處を聴と見定め、又々堀を乗り越して先廻りをした飯綱の杜、先刻から賽銭箱の蔭に息を殺して聴いて居た、凡う今夜の始末と云ふものは悪い事は人にさせ後に廻つて好い事を仕やふと云ふ是は福徳の三年目、始終お前の影身に附添ひ、お前の身体を警固して居たのよ。小花「ア……」其んな事とは少しも知らぬ何うなる事かと思ひました、が夫じやア親方は何も彼も……」治「ウム、残らず蔭で知つて居る、モウ大概好い時分と、到底活かして置くふとの出來ねへ此老婆、ア俺は頼だ事をするとお前は思ふか

も知れぬへが此老婆はナ俺の女房松山の身を苦めた悪徒だ其理由は又繰くり話をすると仕やふが郡内の三五郎と云ふ甲州駿州切ての悪人其三五郎の女房となり自分の子でもねへ松山を敵々苦めた天爵が旋つて来て地獄墮しの鼠山俺の手に掛つて死ぬのも自業自得是でお松の仇討ち軍介さんの遺恨も晴れたと云ふ者だヤ老婆手前の懐中にある其金を此方へ寄越せ死んで行くにやア六文で澤山だとも熊婆の懐中から胴巻を引出してお熊の死骸をば彼の市助の死骸を投込んだ藪壘から下へゴロ／＼

治一緒に心中をしやアがれと突落す忽ち流れの早い河と見へてグオーと押流す治郎吉は四邊に落散るものはないかと思ふ見定め木村の邸から背負出した藪籠も同じく藪壘から下へ突落すと是も流れに沈んだ様子傍らに立つた提灯

も皆川の中へ打棄て 治小花何した今夜の所業と云ひ今夜の始末と云ひ大概俺の身の上も氣か附いて驚いたらうが是には段々仕細のある事だ今迄は世間じやア兎や角云ふが手前とは赤の他人だから成たけ体裁を繕つて居たが今夜といふ今夜悪事を知られた上からは他人にアして置かれねへ何時裏切をされるかも知れねへからは是非とも手前を色にしなけりやアあらねへからまア爾ふ思つて呉んませへ 小花モソ兄さんお前の悪事を知れたから其口塞さに色になれどのお前さんの言葉今夜始めて知つたのじやアありませんお前さんは通常の人ではないと云ふ事は去年から吾俺はチャンと知つてますよ 治はア爾うか其奴ア大失策だ 小花的面の賭博家ではあんど云ふ事は羞しながら惚て居るお前の身の上何彼に附いて氣を附け

天保怪鼠傳

二百四十
る何うも通常の人でないといふ事は疾くに吾俺は氣が附いて
居りますよ。治爾う氣が附いて居られちやア仕方がねへ兎も
角開所等へ往つて、安旅籠へでも泊つて緩くり話しをすると仕
やふ
是から治郎吉は表向惚ては居たが女房の手前浮世の義理で手
出しをしおかつたが、今夜といふ今夜は破れ感觸、女夫の約束を
したものと見へて、暗路を辿る姿見橋、其夜は何所へか影を隠し
て仕舞ひました。

さて此結局の附かぬと云ふは、時文政七年の七月朔日の朝であ
ります、不思議な事があればあるもので、牛込高田町の水車の所
有者佐平と云ふ者の水車で、急に水車の回轉が悪くなつたから
佐ハタナ、今日は水が少ないか知ら、何うして減水したらふと佐

天保怪鼠傳

二百四十一
平が朝起て見ますると、水の少ないも道理で、水車へ引まする、水
道に年齢五十有餘に相成る老婆の死骸、其後から仲間体の死骸
が何れも水道に横たはつて水を源切て居ります、殊に怪しきは
一個の葛籠が水に浮つ沈みつして居るから、是は不思議と佐平
に於ては家主五介を喚起して其死骸を引揚て見ると老婆の方
は右の脇腹を唯一ト太刀で抉つた傷、仲間体の男の方は、手に
て吭を締たものか吭に紫色の痕が残つて居る、何れも變死に相
違ふい所有品は、篋入、手拭のみにして外には何も無い、其葛籠を
見ますると、中には夏冬の衣服が五十点ばかり判然と葛籠の蓋
に書いてありますには「市ヶ谷火の番町木村奥」と記し、尙又木村
の提灯があるから、此二々品を證據として木村方へ水車の株主
佐平、同所の家主五介が附添つて相談に來ました。

天保怪觀傳

此時木村軍介は四苦八苦斷末魔の苦みをして居て、誰も取次く者があいからして、據るなく小普請組頭松平大盛物殿方へ訴へました。木村軍介は水を呑んで漸く蘇生をしましたが、其後心地例なら発狂の如くにありましたから何を醫ても更に死りませぬ。

文政七年七月の五日にありまして其頃各奉行と聞へを取られたる筒井伊賀守殿が御取調になりました。到頭木村軍介は家事不取締家名改易本人に於きましては追放と相成ましてございませぬ。無難や木村軍介は鼠取樂を呑んで身体整はず病氣の中に家名改易千五百石を棒に振りましたが、實に恨むべきは色慾の両道でございます。又一方木村の邸から窃盗をして、老婆お熊仲間市助を殺した相

天保怪鼠傳

手は何者であるかと云ふ此探偵が嚴重に相成ました。が誰一人茅場町治郎吉の業を知る者がなかつた。——知る者があいと云ふのは如何に即ち彼が積善の餘慶日頭多くの人を助けて置ますから斯る悪事が發覺しないと云ふは全く治郎吉の徳に依るのでございませぬ。治郎吉は本妻とし、小花を改めて妾といまして世の中を面白可笑く暮して居りましたが、天網恢恢疎にして漏さず、或時大橋向ふの松平玄蕃守と云ふ、三万石の大名邸へ忍込む。此時不思議や妖術が消へて、尾張屋庄七と云ふ槍物町に居りました有名の手先の手に掛つて遂に捕縛になりました。が三十七才を一期として江戸中引廻しの上死罪に行はれ、到頭本所回向院の本堂の右の方へ「徳善信士」と云ふ墓標を残しました。——此墓を建たのは前回に述べました麴町の分銅伊勢屋で

天保怪鼠傳 後編 終

あるといふまた餘程漏れた所もあり、何分製本の丁數に
限りがあり、ますから、残念ながら是にて結局といたします。
々々御退窟さまで……。

明治三十年十二月廿七日印刷
全冊一年一月二日發行

鼠小僧
版權所有

講演者 若林義行
發行所 淺草區三好町七番地 大川鏡吉
印刷者 同 淺草區森田町五番地 小宮定吉
印刷所 同 大川屋活版所

發行所

東京市淺草區三好町七番地

聚榮堂

大川屋書店

○增補 改正 俳諧 歲時記 乘草	○圍 碁 精 要 全二冊	○圍 碁 捷 經 全貳冊	○草花 盆 栽 培 養 法	○草花 木 竹 栽 培 秘 錄	○新 按 高 等 將 碁 秘 決	○日 間 將 碁 獨 習 必 法	○評 論 德 川 世 記	○刑 事 法 註 譯	○日 本 立 志 編	○現 公 用 諸 證 文 大 全	○大 日 本 六 法	○大 日 本 刑 法	○大 日 本 刑 法	○民 事 訴 訟 法 註 譯	○民 事 訴 訟 法	○民 事 訴 訟 法	○刑 法 附 置 編 則	
○實 地 作 文 指 南	○算 盤 傳 授	○新 撰 用 文 獨 稽 古	○開 化 用 文 大 成	○日 用 新 撰 作 文 獨 稽 古	○日 用 作 文 獨 學	○講 釋 消 息 往 來	○漢 書 圖 式	○阿 彌 陀 經 和 訓 圖 會	○真 草 千 字 文 譜	○花 鳥 畫 譜 全二冊	○萬 工 雜 形 畫 譜 全二冊	○記 作 文 軌 範	○習 作 文 新 書	○活 益 新 選 大 成	○活 益 新 選 大 成	○說 作 文 大 全	○天 神 流 柔 術 極 意 教 授 圖 解	
○惶 々 曉 齋 畫 譜	○古 今 模 樣 鏡	○日 本 歷 史 畫 譜	○活 花 手 引 草 全二冊	○遠 州 流 活 花 字 比 學 全三冊	○集 古 圖 譜	○百 工 美 術 畫 譜	○新 刻 萬 物 畫 譜	○萬 物 工 業 畫 譜	○四 季 花 鳥 畫 譜	○曉 齋 百 鬼 畫 談	○日 本 婚 禮 式 大 全	○染 色 法	○勇 壯 劍 舞	○支 那 帝 國 劍 舞	○家 庭 商 人 百 夜 草 全二冊	○新 選 算 法 新 書	○明 治 算 法 新 書	○新 選 開 化 用 文

● 東京市豊島区 三好町七番地 聚榮堂大川臣藏版小説書目

有罪無罪	決闘の果	人耶鬼耶	梅花耶	片手美人	妾の罪	銀行之賊	玉手箱	業平文治漂流奇談	敵討霞初しま	松の操美人の生理	萩江の一節	鏡ヶ池操の松影	鶴殺疾刃の庵丁	松と藤巻者の替絞	雨夜の引窓	蝦夷の引窓	敵討札所の靈験	菊換様王
漢香小史撰	同	同	同	同	同	同	同	圓朝口演	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
女學	お蝶の傳	お民の傳	お婉の傳	歐洲小説黃蓋	元和三勇士	水尾紀三勇士傳	戸州流名譽柔術	雪おろし	江戸美人	小夜嵐吉原奇談	滑稽席上演説	明治浮世風呂	人情思ひの種	空屋美人	河内山	遠藤萬五郎	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	太華山人著	柳綴口演	骨反道人著	同	同	同	伯知講演	伯國講演	柳綴口演	同	同
怪談小町	友千鳥	伏見肥後の駒下駄	檜山麒麟一聲	怪化百物語	政治小説芳園の戀	對の雪	雨後の明月	名譽の花	紀伊國屋文左衛門	講談百種	五人小僧障の白浪	當世書生氣質	探偵人の妻	民訴	民訴	民訴	民訴	民訴
伯國講演	同	同	同	同	同	同	同	同	邑井一	同	同	春の屋	同	同	同	同	同	同